
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 100

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 1981. オランダに戻ってきて
- 1982. フローニンゲンの朝日
- 1983. 今朝方の夢
- 1984. パッヘルベルのカノンと食生活の変化
- 1985. 一昨年と昨年の今頃
- 1986. 追悼
- 1987. 身体の調子を整える重要性
- 1988. フーガの実験
- 1989. 今日の読書から
- 1990. 地球の外から
- 1991. 福永武彦『草の花』より
- 1992. 恵まれた協働関係と科学に対する疑念
- 1993. 実感なき実感
- 1994. 境界線の淵と書くことについて
- 1995. 夢の中の夢の世界へ
- 1996. 言語習得と作曲技術の習得過程及び視覚美と聴覚美
- 1997. 存在関数と生命の発露
- 1998. 裸体の言葉と意思の顔
- 1999. 虚無的世界と豊満な日常
- 2000. 可知的かつ不可知的な世界の中で

1981. オランダに戻ってきて

昨夜オランダに戻ってきた。成田・ヘルシンキ間、ヘルシンキ・アムステルダム間のフライトは予定取りの運行であり、アムステルダムまではスムーズに到着した。しかし、アムステルダムで荷物が出てくる時間が予想以上に遅く、予定していた列車よりも一本遅い列車に乗ることになった。

オランダの列車はよく数分到着時刻が遅れたりするが、今回も途中の乗り換え駅で列車の遅延があった。その影響で、フローニンゲンに到着してから乗る予定だったバスに乗ることができず、極寒のバス停で30分ほど待つことになってしまった。普段バスなどは使わず、駅から自宅まで歩いているのだが、今回は日本から持ち帰ってきた和書を積んだ大きなスーツケースがあったため、徒歩は厳しいと思った。

バスを逃してしまい、30分待つことになったのは想定外だった。時刻はすでに普段私が就寝している時間であったため、一刻も早く自宅に帰りたいという思いがあったのであるから、バスを30分待つよりも、駅でタクシーを拾った方が良かったのかもしれない後になって思う。とはいえ、バスに乗ってからはスムーズに自宅に到着した。帰宅後すぐに就寝しようと思ったが、フローニンゲンの寒さのため、身体が冷えていることがわかったので、浴槽に湯を張り、入浴してから就寝に向かった。入浴をして身体を温めてから就寝したおかげか、今朝はすでに心身が回復しているようだった。

長い空の旅においては、休むべきところで休んでおかないと、到着地についてから心身を崩してしまうことが行きのフライトを通じてわかった。そうしたこともあり、帰りのフライトでは、特にヘルシンキに到着して以降は、文章を書くことも本を読むこともせずに、仮眠をとったり、心身を休めるようにゆったりとしていた。逆に言えば、ヘルシンキに到着する頃には、すでに心身に疲労が現れ、文章を書くことや本を読む余力がなかったとも言える。心身を整えなければ何ら活動に従事することができないのだということを身をもって知る。

今回の一時帰国を通じて、どうも飛行機というのは人間の心身にあまり良い影響を及ぼさないのではないかと思った。端的には、心身への負担があまりにも大きいのである。特に長距離のフライトではそれが顕著である。そうしたことを以前から薄々気づいていたがゆえに、私は飛行機よりも列車での移動を好んでいるのかもしれない。今後長距離移動をするときは、移動手段を船にしてみたり、

フライトの時間を短縮するために、ある都市までは列車で移動し、そこに宿泊してから次の日にその都市の空港を利用するということも今後は考えていきたい。

やはり一日に16時間近く移動するというのは、心身に対する負担が大きすぎる。旅というのは良いものなのだが、その移動方法については工夫を凝らしていく必要があるだろう。

今朝、七時半に起床してみると、辺りはまだ闇に包まれていた。日本ではこの時間帯はすでに朝日が昇っているのだが、オランダではまだ闇の世界であることを再び思い出した。

八時を過ぎた現在は、徐々に空が明るくなってきている。私がオランダを離れている間に、どうやらこの地の日の出時刻は少し早くなったようだ。まずはオランダでの生活リズムを掴みなおし、再び充実した生活を送りたい。フローニンゲン:2018/1/7(日)08:22

No.616: Psychological and Phenomenological Effect of Music

I'm reading "A guide to musical analysis (1987)," which offers profound insights. While reading it, I became more interested in the psychological and phenomenological effect of music. Although I've learned psychology for several years, I've not delved into the psychological effect of music.

In parallel with composing music, I'll cultivate my understanding of musical analysis because it is helpful not only for deeply understanding past music but also for composing new music. Since I'll not be a professional music analysts, I have to prioritize music composition than analysis.

Groningen, 09:39, Tuesday, 1/9/2018

1982. フローニンゲンの朝日

昨夜は遅くにフローニンゲンの自宅に戻ってきたこともあり、就寝時間は普段よりも随分と遅く11時半ぐらいであった。今朝は7時半に起床したため、睡眠時間としては十分だと思うのだが、今日は本格的に活動を再開させるよりも、心身の完全な調整をする日としたい。洗濯や買い物などの雑務を行い、それ以外の時間は学術書や論文を読むのではなく、仮に何か書籍を読むとしても、過去の作曲家の手紙と日記が収められた書籍を読むことにしたい。仮に言語的な活動に従事することが難しければ、作曲実践を主たる活動にしたい。

昨年日本からフローニンゲンに戻ってきた時は、街中に雪が積もっていたが、今年はそのような事態に見舞われることがなかった。確かに、日本に比べて寒いことは間違いないが、雪が積もるほどの寒さではなかったことは喜ばしい。

今朝は嬉しいことに、フローニンゲンの空は晴れ渡っている。日本の朝日とはまた表情の異なる朝日をここでは拝むことができる。空の色も日本のそれとは違って見えるから不思議だ。今日は一切の雲がなく、晴天である。

オランダの日照時間は依然として短いが、二週間前まで続いていた雨期を脱したようである。その証拠に、ここからの一週間は、雨の日が一日ぐらいしかない。ようやく天候的に快適な世界がやってきたと言える。

前述の通り、今日はできるだけゆっくりとして心身の回復に努めたい。それを促進するようであれば、作曲実践を行ったり、学術的すぎない書籍をゆっくりと読み進めていく。心身の回復と生活のリズムの確立、そして思考空間を再び英語に戻していくことをこれから数日間かけて行っていく。

書斎の窓の外から見える景色はとても懐かしく、私の心を深く落ち着かせる。この景色さえあれば、私は再びこの場所で充実した幸福な生活を営むことができるだろう。フローニンゲン:2018/1/7(日)
09:32

No.617: Existential Coldness and Spiritual Tranquility

Today is also severely cold. In addition to the external coldness, my inner world seems to experience coldness. Of course, it is an existential meaning. Yet, the feeling is being embraced by spiritual tranquility now. Groningen, 10:12, Tuesday, 1/9/2018

1983. 今朝方の夢

オランダに戻ってきてからの初日が終わりを告げている。今日は一日中良い天気であった。現在の時刻において、外の世界はすでに闇に包まれているが、それでも今朝方に見た夢をまだ覚えている。その夢については早朝に書き留めることをしていなかったもので、今ここで覚えている範囲の内容を書き留めておきたい。

夢の中で私は、大学時代のゼミの友人たちとどこかの宿泊施設に泊まり、日中から施設の宴会場のような場所で議論に花を咲かせていた。何をテーマに話をしていたのか覚えていないが、随分と議論が盛り上がり、旧交を温めることができた。ただし、議論の途中から、私は宴会場の一角に身をひそめるようにしてその場にいた。誰にも気づかれずに、ある場所に黙ったまま座っていたのである。

宴会が終わりに差し掛かった時、ゼミの友人たちは部屋を後にして、自室に戻ろうとしていた。私は依然としてその場に身をひそめたままにしていたため、ある一人の友人を除いて、私がある場にいることに気づいていないようだった。その友人が私に声をかけてくれたのと同時に、夢の場面が変わった。

次の場面では、私はフローニンゲンの街から引っ越し、別の街に住むことになった。まだフローニンゲン大学に通っているにもかかわらず、私はアイスランドのどこかの街に住むことにした。自宅の周りは小高い山々があり、人気も少ない。空気は澄んでいて、落ち着いて自分の仕事に取り組めるような住環境がその街にはある。ただし、自宅から最寄りのスーパーまで少々距離があり、さらには、そのスーパーの品揃えはあまり良くない。

自宅のすぐ目の前に二両編成の列車が通る鉄道がある。鉄道を走る列車の音は全く気にならないほど小さく、仕事や睡眠の妨げになることはない。

私がなぜアイスランドの街を選んだのかは定かではない。フローニンゲンよりも人口密度が低く、人との接触を最小限に抑えて自分の生活を形作っていくにはうってつけの場所には違いない。しかしながら私は、やはりフローニンゲンの自宅が最も落ち着く場所だと徐々に気づき始めた。再びフローニンゲンの自宅で生活を送りたいと強く望む念が浮かんた瞬間に、私は目を覚ました。

今朝方はそのような夢を見ていた。今はすでに夜を迎えたのに、その夢について覚えていることが少し不思議である。

時差ぼけのためか、夜の七時半を迎えた今は、激しい睡魔に襲われている。今日はかなり早く就寝し、明日から本格的に探究生活を開始できるようにしたい。フローニンゲン:2018/1/7(日) 19:40

No.618: Until a Trip Around the World

I'll take a trip around the world by ship six or seven years later. On the trip, I'll continue to keep a journal and compose music to express unique experiences evoked by each place in the world. Until then, I have to acquire composition skills at a sufficient level to create music as I wish. The benchmark would be that I compose music without any references. I'm envisaging the moment when I keep a journal and compose music as much as possible on a trip around the world to satisfy my creative desire. Groningen, 12:45, Tuesday, 1/9/2018

1984. パッヘルベルのカノンと食生活の変化

昨夜は九時前に就寝し、今朝は四時半に起床した。ちょうど日本に一時帰国する前の起床時間と同じ時間帯に起きることになった。早く就寝し、深い睡眠を取ることができたためか、今朝の目覚めは良好であった。昨日の目覚めも決して悪くはなかったのだが、時差ぼけのためか、夜に近づくにつれて意識が朦朧としていた。おそらく今日再び少し早めに就寝をすれば、完全に生活リズムを取り戻すことができると思う。

今朝方の夢の中で、パッヘルベルのカノンが壮麗に流れていたことを突如として思い出す。夢の中では私を含め、人間は誰もいなかった。そして、一切の心象イメージもなかった。果たしてそれを夢と言えるのか定かではないが、パッヘルベルのカノンだけが夢見の意識の中で流れていた。その荘厳な音楽を聴きながら、私は頭の中でその曲を後追いする形でその音色を幾十にも重ねてみた。一つの旋律が始まり、その旋律を追いかける形で同一の旋律が流れ始める。そのような形でパッヘルベルのカノンを再構成してみると、その音色がさらに荘厳美的なものになった。その音色が引き起こす恍惚さに対して、私は何か独り言を呟き、自分も同種の美を体現させた曲を作ろうという意味を新たにしたところで夢から覚めた。

今日からは、心身のリズムを取り戻すことのみならず、探究のリズムを取り戻す必要がある。日本に滞在中は和書ばかりを読んでいたので、ここから再び和書からは少しずつ離れていく。今日はできれば、午前中にベートーヴェンの手紙が収められた書籍を読み、それをある程度読み終えた後に、ジョン・デューイの全集の第二巻を読み始める。科学に関する専門書や論文にはまだ目を通さず、今日は音楽や哲学に関する書籍を読んでいく。

オランダに戻ってきてから、生活に一つ大きな変化があった。昨年の一年間は、一切料理を作っていなかったのだが、昨日から再び料理をすることにした。米国で生活をしていた四年間のうち、最後の二年間は毎日カレーを食べていた。それと同じように、昨日からタイ風カレーのペーストを購入し、カレーを再び食べることにした。

近くのスーパーでオーガニックの野菜を様々購入し、野菜をふんだんに入れたカレーを作った。購入したカレーのペーストと有機野菜の旨味が上手く合わさり、非常に美味しいカレーが出来上がった。米国時代には、毎日昼と夜にカレーを食べていたが、オランダでは夜だけカレーを食べるようにしたい。ライスの代わりにパンと一緒にこのカレーをこれから毎晩食べるようにする。

食事に変化があったということは、おそらく心身の中でも何か変化があったのだろうし、これからこの食生活を継続することによって、何かしらの変化が心身に見られるだろう。フローニンゲン:2018/1/8(月)05:10

No.619: From the Outer Space

My consciousness entered the outer space. It means that my awareness suddenly went beyond this reality.

I was wondering how the present human society becomes as it is. In my consciousness, the world is a tiny globe as if I could hold it in my hands. While imagining the human society two thousand years ago, I perceived the time span as a grain of moment.

The more time has passed, the more the world has changed. The changing sceneries were quite mysterious to me. Groningen, 14:01, Tuesday, 1/9/2018

1985. 一昨年と今年の今頃

早朝、ふと二年前のこの時期について思い返していた。二年前の一年間は日本に滞在しており、ちょうどフローニンゲン大学に訪問し、サスキア・クネン教授とルート・ハータイ教授との面会に向けて日本を出発する頃だったように思う。二年前の今頃は、『なぜ部下とうまくいかないのか』の原稿を執筆し終え、それを寝かせているような時期だった。あれから二年の月日が流れたということがど

うも信じられない。なぜなら、当時の記憶が昨日のここのように鮮明に、この瞬間の私の脳裏に焼き付いているからである。月日というものは一体何なのだろうか、時間とは何なのだろうか、ということを考えざるをえない。

今年の今頃は一昨年と同様に、『能力の成長』の原稿を書き上げ、それを寝かせている時期だった。あれから一年が経ったのだと思うと、少しばかり感慨深い。一年後の自分は今日をそのように思い返し、二年後の自分は今日をそのように思い返すのだろうか。

今年はこれまでの二年間と違い、自分の書籍の原稿を書き上げ、それを寝かせているわけではない。しかし、現在共著として第三弾の書籍の出版を目指して企画を前に進めている。今回の書籍も成人発達に関するものだが、原稿の大部分は共著者の方が執筆し、私は各章の終りに随所随所解説文を加える計画である。既に文章の構成は出来上がり、ちょうど先日、共著者の方から「はじめに」と「第一章」の文章を送っていただいた。今回の書籍がいつ頃出版されるのかはまだ未定だが、なんとか今年の夏か秋までには出版できたらと思う。

今日はこれからベートーヴェンとデューイの書籍を読む前に、少しばかり作曲実践を行いたい。一昨日の成田からヘルシンキのフライトの最中、ふと、自然言語を用いた文章でも音楽を奏でられるのではないか、という考えが脳裏をよぎった。文章にもリズムがあり、メロディーがある。文字が喚起する思考や感情を活用すれば、ハーモニーすら文章に体现することができる。さらには、転調だって可能である。そのような考えが芽生えた。

文章を用いて音楽を奏でるように、思考や感情、そしてイメージを喚起するような技術を高めていく。それは自分のためではなく、他人のためでもない。技術そのもののためにそれを行う。そのようなことをフライトの最中に考えていた。その考えの実現に向けて、音楽を奏でるような文章執筆方法についても模索と研鑽を忘れたくはない。フローニンゲン:2018/1/8(月)05:54

【追記】

上記の日記で述べているように、第三弾の書籍がもうすぐ世に送り出されることになった。過去の日記を読んでいていつも驚かされるのは、日記で書かれていることの多くが、その後実際に実現されていることである。旅行の計画にせよ、日々の実践や仕事にせよ、諸々のことが過去の日記で書い

ていたように実現されていく。もちろん、日記で書かれたことの全てが実現されているわけではなく、書いてから自分の考えが変わり、行動が変わったことによって結果が異なることも当然ある。しかしいずれにせよ、書くことによって自らの行動が間違いなく変わり、それが何らかの新しい出来事を自分の人生にもたらしていることは確かなようだ。日記を書くことの意義を改めて知る。フローニンゲン：2019/1/12(土)09:23

No.620: Visual and Auditory Beauty

This is my hypothesis, but the visual beauty of music scores might correlate with auditory aesthetic experience. Music scores of great music look elegant as if they were actual beautiful paintings. I'll verify this hypothesis, experimenting on my works. Groningen, 15:35, Tuesday, 1/9/2018

1986. 追悼

今日は四時半に起床して以降、ベートーヴェンの手紙が収められた書籍を読むことと作曲実践をして午前中の時間を過ごしていた。

先ほど昼食を摂り終え、食卓の窓越しから外の景色をふと眺めた。昨日に引き続き、今日のフローニンゲンの天気は晴天である。視界に映る空には雲がなく、あるのは何筋かの飛行機雲だけである。自分も数日前は、あのような飛行機雲の一部であったことが懐かしく思える。

今もまた新たに東の空に飛行機雲が見える。窓から見える街路樹は葉っぱが全て散っており、枝だけの姿になっている。しかしそのおかげで、そこに集う小鳥たちの姿がよく見える。何羽かの小鳥たちが裸の木々にとまり、小さく鳴き声を発している。私はしばらくその鳴き声に耳を傾けながら、ぼんやりと外の景色を眺めていた。

今日は最高気温が一度であり、最低気温は二度であった。最高気温と最低気温の差はほとんどなく、今日も外は寒い。だが、こうした寒い国に特有なのは、部屋の中は暖房が効いており、暖かいということだ。実際、今の自宅の室内は日本のホテルや実家の室内よりも随分と暖かい。さらには、昼

食後のこの時間帯は、開放的な窓から太陽の光が部屋に差し込んでくるため、より暖かく感じられる。

私は少しばかりソファに腰掛け、太陽の光を浴びながら、壁に掛けられているニッサン・インゲル先生の二つの絵画作品を眺めていた。日本に一時帰国している最中に、インゲル先生が一昨年(2017)の11月にお亡くなりになられていたことを知った。ちょうど私はその年の7月に日本でインゲル先生にお会いする機会を得ていた。それから数ヶ月後にインゲル先生がお亡くなりになられていたことを、私は数週間前に初めて知った。

インゲル先生に依頼をさせていただいた作品を持って昨年の年始にオランダに帰った時には、すでにインゲル先生はこの世を去っていたのだと知る。今、書斎の壁に掛けられているのは、『想いの果てに』というタイトルの作品と、私の方で構図とイメージを練らせていただき、タイトルも自分で決めさせていただいた、『平穏な悟り世界における死と再生』という作品である。

私はソファに腰掛けながら、この二つの作品を静かな気持ちで眺めていた。

昼食を食べながら考えていた、「全ての人が行くべき場所」についてまた考えている自分がいた。自分もいつかその場所に行くのだということを、私は静かに受け止めていた。そちらの世界に行くまでに一人の人間がなす事柄や、そちらの世界に行くまでの時間の意味について考えを巡らせる。その考えは、今自分を取り巻いている外の世界と同じぐらいに静かである。

考えが静かなのだ。これこそ、あちらの世界の平穏さであるに違いない。

あちらの世界はきっと、思考も感情も感覚もない、無限に平穏な世界なのだろう。人は皆、その場所にいつか必ず行き、平穏に還っていくのだ。フローニンゲン:2018/1/8(月)12:48

No.621: The Relationship Between Harmony and Rhythm

While composing music, I came up with a question about which I should prioritize a harmony or a rhythm when both cannot be modified simultaneously. Perhaps, a melody should surpass both of them, but what is the relationship between a harmony and a rhythm? Harmony > Rhythm or Harmony < Rhythm? Groningen, 15:57, Tuesday, 1/9/2018

1987. 身体の調子を整える重要性

今朝は五時に起床し、五時半から一日の活動を開始させた。昨日は、夕方までは心身の状態が良好だったのだが、夕食を終えてから突然の睡魔に襲われた。やはりまだ時差ぼけが完全に回復していなかったのだろう。夕食を終えてからは本を読むことも文章を書くこともおぼつかず、作曲実践を行える気力もなかった。そのため、昨夜は九時前に就寝した。

二日連続で九時前に就寝をし、良質な睡眠をたくさん取ったため、今日はそろそろ時差ぼけが解消されていることに期待したい。この世界で活動していくことにおいて、身体の状態がいかに大切かを改めて思い知る。

正直なところ、心を整えるよりもまず先に身体を整えることが大切だろう。日本に一時帰国中の最初の数日間で体調を崩したが、その時に思ったのは、身体の状態が優れない時に心の状態をいくら整えようと思ってもそれは到底不可能なことである、ということだった。

一度身体の調子を崩してしまうと、そこから精神を立て直そうと思っても、身体の不調さが精神をくじく。まさに人間というのはホロン階層を持っているため、物質圏(身体)が崩壊の危機にさらされると、それを精神圏(心)の働きでなんとかしようと思ってもなんともならないのだ。

とにかく身体よりも精神を重要視する風潮がみられるが、それは誤っているように思える。とにかく人間活動の基盤は身体である。そしてこれはおそらく、人間発達においても当てはまることだろう。身体、とりわけ身体感覚を十分に涵養することがなければ、精神的な発達が成し遂げられるとは考え難い。

ピアジェの発達理論にあるように、私たちの発達は運動感覚的な段階から開始される。その段階は身体と密接に関係しており、身体感覚の基礎を構築する段階である。この段階の基盤が脆弱の場合、それ以降に積み上げられていく発達はおぼつかないだろう。

身体の調子を整えるためには、食事・睡眠・運動の三つが最重要となる。これらの三要素は当たり前にも思われるかもしれないが、よくよく自らを省みてみると、それらのうちの一つか二つが欠けている人が多いのではないかと思う。現代人の中を見回してみると、それらの三要素を日々の生活にう

まく取り入れている人はほとんどいないように思える。良質な食事と睡眠、そして適度な運動は、身体の調子を整えることに不可欠であり、それらはひるがえって精神の調子を整えることにつながる。

オランダでの生活を再び始めるにあたり、身体の調子を整えることが何よりも大切であることを肝に銘じ、身体の調子を整えるために不可欠な三つの要素を絶えず念頭に置いておきたい。フローニンゲン:2018/1/9(火)05:50

No.622: Music, Paintings, Literature, and Philosophy

I determined that my life had to be led around music, paintings, literature, and philosophy; science should be following them. I want to always indulge myself in them. All of them are intertwined with luminosity of enlightenment. Groningen, 18:50, Tuesday, 1/9/2018

1988. フーガの実験

今日はどのように一日を過ごそうかと考える。一日の活動の骨子は普段と全く変わらず、書を読むこと、文章を書くこと、曲を作ることなのだが、その具体的な内容をどうするかをいつも毎朝考える。

作曲に関して、昨日はフーガの技法について少しばかり学習していた。学習といっても、先日注文したフーガのテキストが届いていないため、バッハの楽譜を眺めながら、フーガの法則を掴もうとただけである。

バッハの楽譜を眺めてみると、当然ながらフーガには法則性があり、その法則性を正しく理解した上でそれを用いなければならないと思った。今はまだ手元にフーガの専門書がないため、これは憶測に過ぎないが、バッハの楽譜から読み取れたのは、主旋律が走り始めてしばらくすると、同様の旋律が音程が上がった状態で走り始めることがわかった。私が参照していた曲の場合、バッハは主旋律よりも5度ほど上に上げて次の旋律を走らせ始めていることがわかった。5度上げることが決まらなかったため、試しに別の度数を適用してみた。

その実験の際に、おそらく5度上げているのは和音の特性によるものだと思います、であれば3度上に上げて良いのではないかと仮説を立ててみた。その仮説を検証する実験をしてみたところ、3度では主旋律と近すぎるのか、時に旋律同士が交差してしまったり、音が綺麗に響かない箇所が多々あっ

た。3度上でもうまく第二の旋律を走らせることができるのかもしれず、一回の実験では結論付けることはできないだろうが、基本は5度上の法則性があるのかもしれない。

次に浮上した疑問は、複数の旋律をずらしながら走らせていくと、最後には他の声部に空白が生まれ、その空白をどのように埋めればいいのか、ということだった。バッハの楽譜を眺めると、どうやらそこには新たな旋律を適用しているようだったが、ここにも何か法則はあるのだろうか。

参照していたバッハの曲は四声のものだったが、最初からそれほど多くの声部を持つ曲を作ることではできず、実験として二声の曲を作ってみた。フーガの技法を始めて適用する私にとって、わずか二声の曲でも難しかった。

フーガについて解説したテキストを用いることをせず、バッハの楽譜のみから手探りでフーガの技法を学ぶことは難しいのかもしれないと思ったため、今後はテキストと実際の楽譜の双方を参照する姿勢を持ちたいと思う。テキストからは法則性という理論を学び、実際の楽譜からは生きた具体例を学んでいく。それらのどちらかではなく、それらの両方から学びを深めていくことが大切である。そして何より、昨日の実験のように、実際の曲を作ってみることが何よりの学びとなる。とにかく試行錯誤をしながら、仮説構築と実験を繰り返す形で曲を毎日作り続けていくことが大切だ。

今日もバッハの楽譜を参考に実験的にフーガを適用した曲を作り、もう一曲はショパンのいずれかの楽譜を参考にしながら曲を作ろうと思う。とにかく毎日断片的でもいいので曲を作るという実践に触れていることが重要になる。フローニンゲン:2018/1/9(火)06:10

No.623: True Novel

I think diaries that I keep everyday can be a lifelong novel someday. Everyday is a part of the novel. This novel is neither fiction nor non-fiction. Instead, it is as it is.

A true novel must be beyond fiction and non-fiction because our life is always transcending our imagination and socially constructed facts. Groningen, 18:58, Tuesday, 1/9/2018

昼食を摂り終えた後、書斎の窓から外の景色を眺めると、辺りが妙に静かな感じがした。午前中は太陽の光に恵まれていたが、今は太陽が薄い雲に隠れてしまっている。街路樹に植えられた裸の木々が風に揺れている。

今日は午前中に、“A guide to musical analysis (1987)”のある章を読んでいた。

仮に音楽が人間の感情や感覚を十分に表現しうるものであれば、音楽分析を通じて人間の性質に迫っていくことができるのではないかと、という考えを得た。もちろん、この考えの前提が破綻してしまっ
ては元も子もないが、音楽は自然言語にはない形で人間の感情や感覚を表現してくれるものであるため、音楽の分析を通じて、言語の分析にはない観点で人間本質に迫っていくことができるだろう。

本書を読みながら、楽曲分析の方法には様々なものがあることを改めて知り、これから少しずつ分析の観点を獲得していきたいと思う。ただし、私は音楽分析の専門家になろうというわけでは決してなく、あくまでも音楽を通じた人間理解のため、そして何より自分の作曲技術の向上のために分析の観点を身につけていく。

楽曲分析の観点が一つ増えるたびに、作曲技術が一つ進歩を見せる。そしてそれは、人間理解のさらなる一歩につながっていくと実感している。

今日はこれから、以前ライデンの古書店で購入した、“Society and spirit: A trinitarian cosmology (1991)”という書籍に取り掛かる。本書は外部宇宙に関するものではなく、ヒュームやカント、そしてホワイトヘッドの流れを汲むコスモロジーに関する書籍である。

200ページほどの本書を一読するのにどれだけの時間がかかるかわからないが、夕方までの数時間をかけて本書を読み進めていく。本書の一読が完了するか、半分程度まで読んだ時の感覚に応じて、それ以降はある小説を読みたい。それは先日日本から持ち帰ってきた、福永武彦氏の小説である。数ある全集の中でも、今日手に取ったのは、『草の花』が収められた全集である。この作品を選んだ理由は自分でもわからない。とにかく今日この作品を読んできたいという衝動が芽生え、

本書を直感的に手に取った。この250ページほどの小説から、なぜだか静かな音色が聞こえる。この小説を読みながら、どこか深くて静謐な世界の中に沈んでいけそうな気がする。フローニンゲン：
2018/1/9(火)13:21

No.624: Visual and Auditory Beauty of Music

I almost confirmed the validity of my hypothesis that visual beauty of music scores correspond to auditory aesthetic experience. Distinguished computer programmers can perceive excellent codes as pictorial beauty, and eminent mathematicians can grasp the perfection of mathematical equations from their beauty. It is true to music. Proficient composers create beautiful music with exquisite music scores. They can intuitively comprehend the perfection of music in both visual and auditory ways. Then, they can represent it in the form of music and a music score.

Groningen, 19:46, Tuesday, 1/9/2018

1990. 地球の外から

ふとした拍子に私は書斎のカーテンを閉めた。外の世界から遮断され、どこか別の世界の中に入り込んでいきたいかのような気持ちがそうさせたのかもしれない。

私は普段カーテンなど閉めない。朝も昼も夜も、外の世界が見えていないと落ち着かないのだ。それはどこか、自分の内側にある、この世と絶えず繋がっていたいという切実な思いの現れなのかもしれない。だが今は、書斎のカーテンを閉めている。

閉めて開くものがあるのであれば、私は喜んでそれを閉めたいと思う。しかし、何も開かないのであれば、なぜそれを閉める必要があるのだろうか。

オランダに戻ってきてから丸二日が経った。私の意識はまた元のように、通常と言う名の異常な通常意識に戻った。通常なものは異常であり、異常なものは通常である。いや、より正確には、通常なものが異常なものに変転した瞬間に立ち現れるものこそ通常なものだと言えるだろう。さらに正確には、通常なものも異常なものも、そもそもそんなものは存在しないのではないだろうか、と問うことができるだろう。

日本に一時帰国する前後の生活で経験されていた意識は、やはり日本に帰国していた時のものと異なっている。私はそれらのどちらをも変性意識だと認識していた。その認識は、それはそれで間違いではないのだろうが、今の私には、もはやそれらの両方が通常な意識状態であると思える。いや、上記で述べたように、それらは変性意識状態でも、通常な意識状態でもなく、ただ意識あるのみ、と言ったような状態だと言える。

とにかくまた、捉えどころのない生が始まった。それは掴もうとすればするほどに、自分の手からこぼれ落ちていく。

今の自分の意識状態について考えていると、ふと夕方に、自分の意識が地球を飛び出したことを思い出した。笑い話でも冗談でもなく、私の意識は地球を飛び出したのである。

地球の外に意識が飛び出してみると、丸い球体の地球が手のひらに乗っているかのように見えた。私はそこで奇妙な絵図を見た。それは、遥か昔の地球から現在にかけての地球の姿だった。より具体的には、人間の文明の変化の歴史を地球の外から一瞬にして把握している自分がいたのである。

この星にこのような文明が生まれたことを不思議に思う。さらに不思議なのは、この小さな星の上に、時間の経過と共に変化してく文明の姿である。

どう考えても不思議ではないだろうか。なぜ地球上に文明が生まれ、それが変化していくのだろうか。

物理的に丸い地球を外から眺めていると、物理的ではない主観的かつ間主観的な文明がこの星で誕生し、それが時代の経過と共に変化してくことの神秘を見る。

過去数千年に及ぶ人類の歴史が一粒の瞬間であるかのように知覚された。気がつくと私はまた、地球の外から地球の中にいた。私は自分の内側に再び戻ってきていたのである。

「そろそろカーテンを開けようか」という声が内側から聞こえる。外はもう随分と寒そうだ。フローニンゲン:2018/1/9(火) 19:20

While composing music yesterday, I noticed that different chords have distinct dimensions of time and space. More specifically, a close and open position have non-identical time and space. The density of sounds might determine the dimension of time and space. This finding occurred to me in a sudden.

Whenever I compose music, I always discover a hidden aspect of music. Today will be also such a day with a new discovery. Groningen, 07:30, Wednesday, 1/10/2018

1991. 福永武彦『草の花』より

昨日、何かに引き込まれるように、福永武彦氏の『草の花』という小説作品を読み進めていた。昨日の夕方から就寝にかけて読んでいたこともあって、気がつけば半分以上も読み進めている自分がいた。

以前の日記で書き留めていたように、私は小説というものを読むことができない。だが、福永氏のこの作品だけは違った。

日本から福永氏の一連の小説作品を持ち帰ることを決意した時、福永氏の作品世界は他の小説家とは随分と異なることを直感的に感じ取っていた。それはおそらく、福永氏が作品の中で展開している主題であり、作品の中に込めている思想によるものと思われる。『草の花』の中においても、「愛」「孤独」「死」という三つの事柄が主題として色濃く立ち現れている。

作品を読み進めると、小説作品の一文一文を丁寧に読み進めている自分に対して、私自身が信じられないような気持ちになった。しかしその後は、そうした気持ちすらも生じないほどに、福永氏の作品世界の中に入り込んでいる自分がいた。

小説とは非日常の日常世界にいざなう力があるらしい。あるいは、日常の非日常世界と言った方が正しいかもしれない。いずれにせよ、自分にとって大切な意味を持つ小説作品というのはこの世界に存在しているようであり、それは間違いなく、今の自分の世界とそれと違う世界を結びつける。そ

して読後には、元の世界とは違う世界の中を生き始めることを促す。自己を捉えて離さない作品にはそのような力が内包されているようなのだ。

作品の中に記載されている情景描写や登場人物の発言のいくつかは、とても感銘を受けるものであった。私はそれらに下線を引き、時に自分の考えなどをその横に書き綴った。

福永氏の作品を読みながら気づいたことがある。それは、傑出した小説作品は、哲学や心理学のどんな優れた学術書よりも人間の本質に近づき得るということだった。

優れた小説作品は、哲学や科学以上に人間の真理に肉薄し、人間存在の本質を開示する力を持っている、ということを初めて理解した。言い換えれば、私にとって、傑出した小説作品以上に人間存在について深く考えさせてくれるものはない、という考えが芽生えたのである。そのような小説は極めて稀であるが、福永氏の小説はその最良の例である。

小説が哲学書や科学書以上に人間存在の本質を開示し得るということに対して、またそれを小説空間という体験場を通じて読者に伝達し得るということに対して、私は嬉しい驚きに襲われていた。
フローニンゲン:2018/1/10(水)06:55

No.626: A Back of a Dragon

How do we feel leading a daily life, riding on a back of a dragon? If you've never seen a dragon, your eye of spirit is overshadowed. We inherently must be living a daily life, riding on a back of your dragon. Groningen, 12:12, Wednesday, 1/10/2018

1992. 恵まれた協働関係と科学に対する疑念

今日は早朝に、現在協働プロジェクトを進めさせていただいている関係者の方たちとオンラインミーティングを行った。複数のプロジェクトを並行させる形で進めていたためにこれまで気づけなかったが、今は四社ほどの組織の方たちとご一緒させていただいている。今日のミーティングでも感じたことであるし、これまで折を見て自分の感想を述べていたが、本当に私は協働者の方たちに恵まれていると思う。

これまで自分が行ってきた探究活動を通じて得られた知見や経験は微々たるものであるが、私はどのようにこの社会に関与していけばいいのかをいつも考えさせられてきた。そのたびに、この世界で自分がなせることなど極わずかしかないうちに気づかされるが、それでも自分にできる範囲の仕事に従事していこうという気持ちになる。書斎の窓から見える裸の木のように、そこにあることを通じて自分の役割を果たしていくことができたと思う。

今日はこれから昼食を済ませた後に、昨日から読み始めた“Society and spirit: A trinitarian cosmology (1991)”という哲学書に取り組みたい。昨日も改めて気づいたが、自分の中で哲学と音楽は極めて重要な位置を占めている。そしてそこに今、文学が入り込み始めている。それでは科学の位置付けはどうなのか？そんな問いが立った。

現在フローニンゲン大学で科学的な研究に従事しているように、科学は確かに私にとって大事な領域だ。しかし、いくら科学的な探究をしていても見えないことがあり、それに気づかせてくれるのが哲学・音楽・文学の価値だと思う。もちろん、哲学・音楽・文学に開示しえないことを科学はこの世界に開示することができる。だが、私は今後科学者としてあり続けたとしても、本心は科学よりも哲学・音楽・文学を愛しているように思うのだ。

今後のことはわからず、科学への愛が再び再燃することもあるかもしれないが、現時点においての科学の位置付けはそのようなものである。私はやはりどこか科学に対して払拭することのできない疑念を抱いているのかもしれない。

「科学的なアプローチの価値を知っている、だが・・・」というセンテンスが頻繁に脳裏をよぎる。科学を絶対的に信じられない本当の理由は何なのだろうか。それを探る日々は今後もまだ続きそうだ。しかもそれは、科学研究に従事しながら進めていかなければならないものである。フローニンゲン：2018/1/10(水)11:49

【追記】

幸いにもその後、科学に対する疑念がいかなるところから生まれているものかを掴むことができた。それを持って私は、科学研究に純粹に従事することからは離れ、哲学と音楽、そして絵画や詩の道に入っていくことになった。フローニンゲン：2019/1/12(土)10:26

I came across the sentence: “Creativity is the power of divine intersubjectivity.” I must think about the underlying meaning. Creativity does not derive from subjectivity but from intersubjectivity. Why do I need others? Why does my creativity need others? Groningen, 13:20, Wednesday, 1/10/2018

1993. 実感なき実感

昼食を食べながら、食卓の窓越しから外の景色を眺めていた。今日は曇りがちな一日であり、早朝には小雨がぱらついていた。

窓の外から景色を眺めていると、自分は一体日々何をしているのだろうか、という問いが現れた。この問いはとかく珍しいものではなく、頻繁に私のところに訪れる。

生きることの不確かさに包まれた心。あるいは、より強い生の実感を求める心が自分の中に存在していることに気づく。

今抱えている囚われや葛藤は一体何なのであろうか。その問題の核心はいつも不鮮明でありながら、私の見えないところで確かに存在していることがわかる。

自己を取り巻く囚われや葛藤からどのように私たちは解放されていくのであろうか。それはおそらく、既存の囚われや葛藤を超えて新たな囚われや葛藤に向かっていくことによって徐々に解消されていくものなのだろう。

究極的な解放への道のりは長く険しい。既存の囚われから解放されるためには新たな囚われが必要であり、今の葛藤から解放されるためには新たな葛藤が必要だというのは皮肉ではないだろうか。だが、そのようなプロセスを辿っていかなければ、根本的には何も解放されないのだ。

白いカモメが曇った空を優雅に飛んでいる。飛んでいる空は曇っているのに、なぜあのカモメはそれをものとししないのか。あのカモメは、解放の本質を体現しているように思える。12:53(執筆中断)

目の前の通りを車が無機質に走り去る。それと何一つ変わらず、私はある哲学書の字面だけを追いかけていた。

以前にライデンの古書店で購入した、コスモロジーに関する哲学書は、内容的には充実しているのだが、それを読む自分はどこか虚しい。時が刻一刻と流れすぎると同じように、字面を追う視線だけが流れていく。それに気づいた時、この本から一旦離れることにした。今の私が求めているのは、もっと自分を捉えて離さない、生の深い側面に触れた言葉なのかもしれない。客観的な記述はいらないのである。そんなものよりも、徹底的に主観的な言葉が欲しい。

ある別の人間から生み出された、徹底的に主観的な言葉を私は欲している。どうにもならないような生の奥深さを真に語りかける言葉が欲しい。そのような言葉を投げかけてくれるのは、私にとっては音楽であり、文学なのかもしれないというわずかな光が差し込んでくる。生きている実感も充実感も、人間の本質も、それらを外面的に語ろうとする言葉からは何も得ることが無いように思えてくる。

これから仮眠を取り、昨日の続きとして、再び福永武彦氏の『草の花』を読み進めたいと思う。一つの文学作品や音楽作品が、聖書や仏典と同じ働きを持ちうるということにただただ驚かされるばかりである。フローニンゲン:2018/1/10(水)13:30

【追記】

上記の日記は、科学に対する私の疑念を見事に表現している。結局私は、生きている実感や充実感、そして人間の本質に関する実存的な言葉を大切にしているのだ。それらを外面的に寒々しく語ることに意義を見出すことはできない。知識として科学研究を参照することはあっても、自らが科学言語を用いて論文を執筆しようと思わなくなったのはそのためだろう。雨脚が突然強まってきた。フローニンゲン:2019/1/12(土)10:34

No.628: Value of Literature

Ephemeral but eternal silence emerged. I was in there. I was thinking about the possibility of literature, which seemed immense to me. Literature is not a servant of philosophy in terms of disclosing inner truth. Rather, it can unfold what philosophy cannot reveal. Literature, it has unalternative precious value. Groningen, 16:46, Wednesday, 1/10/2018

隣人と自己との境界線の淵を彷徨っているような感じがした。隣人は自己であり、自己は隣人であるという気づきから、また何か違う気づきに移り変わっていく瞬間の中に私はいたように思う。

先ほど、そして少し前に、とても奇妙な想念が芽生えた。それは自分を取り巻く人たちは全て自己であるのと同時に、全くもって他人であるということだった。それは家族も含む。家族が全くの他人として認識され、私は一人ぼつんとこの世界に浮かんでいる無人島のように思えた。

夕方、書斎の窓におもむろに近づき、私は道行く人たちの姿を眺めていた。自転車に乗って自宅に帰ろうとする子供たちの姿が目についた。彼らには彼らなりの人生が確かにあり、自分にも自分なりの人生があるということが、どこか沈黙をもたらすような神妙な気分にした。

自分と他者の問題について。この問題は、いついかなる時も自分につきまとっている。そしてこの問題は、一人の人間が固有の生を生きていくことと密接に関係しているように思う。自分でもどうしてこの問題についてこうも表層ばかりを撫でるようにぐるぐると回っているのか解せない。

問題に取り憑く自分と自分に取り憑く問題。何度も何度も繰り返し現れる問題について、一向に回答らしい回答を出せないまま、それについてひたすらに書き留めている自分がいることは承知している。しかし、自分にできるのはやはりそれしかないのだと思う。この問題に進展がなくても一向に構わない。進歩がなく、以前と同じ事柄を何度も書き留めていても一向に構わない。重要なのは、書き続けることである。それが生き続けることの支えとなる。

問題の解決も進歩も何も求めない。求めることは、ただ書き続けることであり、書くことを通じて生き続けることである。これは生への執着なのだろうか。執着とはまた違う何かが人間の奥底に存在していると信じたい。

魂の求めに応じて書き続けること。それを何よりも優先させたい。

この問題についてもはや何も書かなくなった時点で、私はこの問題から解放されていると信じたい。書くことを通じて問題を解決しようとするような浅はかな願いが自分の中にありはしないだろうか。

この問題が解決されるかどうかは本質的には重要なことではないと思うのだ。なのになぜ自分は、書くことが持つ力にあやかろうとするのだろうか。なぜ自分は、書くことに何かを期待するのだろうか。書くことに何も期待してはいけないのだ。

書き続けることは生き続けることである。そう述べたのは自分であったし、それは今この瞬間も正しいように思える。であれば、その正しさを確証させる何かにより自己を委ねてみてもいいのではないだろうか。書き続けることは自己の存在証明にとどまるものではなく、単に生き続けることを担保するものでもないような気が始めている。

自分の言葉を書き留めておくことの中には、まだ今の自分には全く見えない何かがあるような気がするのだ。それが何かは今の私には皆目見当がつかない。自分にできることは、本当に書くことだけになった。フローニンゲン:2018/1/10(水)15:55

No.629: Priority

I thought that learning music composition was similar to the process of learning a second language, mathematics, or a programming language. Every learning domain requires us to acquire a certain amount of knowledge on vocabularies and grammar. I'm in the process of learning musical vocabularies and grammar. Without them, I could not expect the progress of my music composition.

I'll start to read Schoenberg's "Fundamentals of musical composition (1967)" from tomorrow, but I'll still continue to focus on how to write beautiful melodies. Modulation, harmony, and fugue are an advanced topic to me, though I want to deepen my understanding of them. I'll prioritize how to write melody lines for a while. Groningen, 19:37, Wednesday, 1/10/2018

1995. 夢の中の夢の世界へ

小鳥のさえずる声が聞こえる。時刻は早朝の五時半に近づきつつある。

辺りは漆黒の闇に包まれているが、こうした景色はもはや日常と化しているように思える。そうした闇の世界の中で一人活動を始める自分もまた、日常的な光景の一つに過ぎない。

今朝は起床する際に、頭の中で何かを考え続けていた。それはやはり文章と曲を作ることに關するものであった。そこではまた新しい考えが浮かんでいたが、それを頭の中で念仏を唱えるように繰り返すばかりであったため、今となつてはそれが何であったかを覚えていない形で、それは自分の内側のどこかにしまわれているような感覚がする。そうした思念が生み出される直前、私は夢を見ていた。前職時代のオフィスらしき場所で働いている夢である。

私はあるところまで仕事を済ませた後、自分の机の上で音楽關係の書籍を開き始めた。多くの人たちはまだ働いている人が多かったが、ちょうど私が書籍を読み始めた頃に、周りの人たちも少しずつ仕事の手を止めて各自の好きなことに取り組み始めた。その様子を私は背中で感じ取っていた。

しばらく書籍を読み進めていると、どこからともなく音楽が聞こえてきた。音楽が聞こえる方を見ると、それは私の元同僚と上司が奏でる音楽であった。彼らの方を見ると、手元にあるパソコンから音楽が流れていることがわかった。その音楽は心地よくも不快でもない。何か感情が動かされるわけでは決してなく、単に音が流れているということだけを認知させるような音楽だった。

その音の流れを気にかけないようにするかのごとく、私は引き続き手元の書籍を読み始めた。すると今度は、私の席からは随分離れた後方から、二人の男性の話し声が聞こえてきた。その話し声はフロア中に響き渡るほど大きなものであった。だが、どのような内容の話かは私の席からはわからない。二人の男性が時折笑いながら大きな声で話していることだけがわかる。先ほどの音の流れとは異なり、二人の声は読書の妨げとなり、幾分不快感を引き起こした。すると私は書物を机の上に置き、そこで仮眠を取り始めた。

どれほど仮眠を取っただろうか。意識が眠りの意識へと向かっていく最中に、二人の男性の声はもはや聞こえなくなっていた。私は眠りの意識の中にすっと落ち、しばらく夢の世界の中にいた。

夢の中の夢の世界に落ちていく自分。仮眠から覚めた時の自分はまだ夢の世界の中にいるということは、どこか不思議な感じがしないだろうか。夢から覚めたと思ってもそれはまだ夢の世界の中にいるのである。

仮眠中の私は一切の夢を見ていなかった。幸か不幸か、仮眠中に夢を見ていなかったということは、仮眠から覚めた世界がまだ夢の中であることを気づかせてくれた。私は机に伏した頭を上げ、

辺りを見渡してみると、オフィスには自分以外の人は誰もいなかった。その時の時刻はまだ夜の八時あたりだったと思う。おおよその時刻を触知した瞬間に、私は夢から覚めた。

今日も昨日と同様に、いつもと変わらぬ変わった一日を過ごすことになるだろう。今日から、アーノルド・ショーンバーグの“Fundamentals of Musical Composition (1967)”を最初から丁寧に読み進めたい。それと合わせて、メロディーに関する書籍を読み進めていく。今はまた作曲理論の基礎を固めることに意識を向ける。

フーガ、ハーモニー、転調などのトピックは一旦脇に置き、何はともあれメロディーの創出方法に探究の焦点を当てていくことが賢明だと昨日思った。今日もまた、日常と化した目の前の闇と同様の日常を生きることになるだろう。フローニンゲン:2018/1/11(木)05:48

No.630: Blend with Memory and Present Feelings

It seems to happen that mysterious music occurs within me, blending with my present feelings and one of the unforgettable songs in my memory. Groningen:07:19, Thursday, 1/11/2018

1996. 言語習得と作曲技術の習得過程及び視覚美と聴覚美

今日はこれから真っ先に作曲理論に関する書籍を読み進めていく。昨日浴槽の中で、作曲技術の習得過程と他の言語を学ぶ学習過程の関係について考えていた。それは決して考えようとしていたのではなく、考えの方からこちらに歩み寄ってきた形だった。

作曲技術の習得過程と外国語やプログラミング言語などの学習過程は非常に似ているように思える。その言語に固有の語彙を習得し、それらの語彙を組み合わせることで意味のあるものを生み出すための文法の学習は欠かせない。さらには、そうした語彙や文法を取得するためには、その言語を用いてみるという実践が不可欠となる。

これらの学習要素は、まさに作曲技術の習得においても当てはまる。作曲をするために必要となる語彙が存在し、それらの意味を理解した上で、ある文法規則に則った形で語彙を組み合わせしていく必要がある。ここで述べている語彙というのは、音程とリズムを持つ音符の組み合わせ方に始まり、

演奏記号、そして音楽理論が持つ諸々の概念を含む。それらの語彙を獲得し、それを文法規則の中でうまく組み合わせることによって音楽を生み出していく。

そのようなことを考えてみると、私はやはりまだまだ作曲に関する語彙と文法の知識が欠けているように思う。有意味な音楽を作るに際して、活用できる語彙と文法があまりにも貧困すぎる。ここからは外国語を学ぶのと同じ意識を持って、実践を通じた語彙と文法の獲得に努めていく必要があるだろう。そして何より、その学習プロセスを焦って進めてはならない。外国語の習得と同じように、作曲技術の習得も長大な時間をかけて行われるべきであるし、外国語の習得、いわんや母国語の涵養ですら終わりはないのであるから、作曲技術の精進も一生涯を賭けてなしていくものであると理解しなければならない。

自分がどのように英語を獲得し、どのように日本語を涵養してきたかをもう一度省みる必要があるだろう。豊かな語彙と深い文法理解の獲得を、毎日の小さな実践を通じて少しずつ実現させていきたい。そうしたことを考えながら、数日前に考えていた、楽譜の美しさと曲の美しさの関係について再度思考が及んだ。視覚的に美しい音楽は聴覚的にも美しいのではないか、という仮説のようなものが自分の中で芽生えた。

ある美しい曲を聴き、その楽譜を眺めてみると、そこには固有の絵画的な美が顕現されていることが多い。あえて控えめに「多い」と表現したが、今のところ美しいと自分が感じる曲の楽譜を眺めてみた際に、常にそれは絵画的な美を宿している。ここに、聴覚的な美しさと視覚的な美しさは何か見えない糸で繋がっているのではないか、という考えが浮かんでくる。それは美の「絶対的な正しさ」と言えるようなものに関係しているのかもしれない。あるいは、美が持つ「絶対的な真実」とでも言ったらいいだろうか。これは例えば、絶対的な真実を内包したプログラミングコードや数式が外見上も美しいのに関係している。

視覚的に捉えることのできる外見上の美とそれが真に内包する内側の美は密接につながっているようなのだ。音楽に関して言えば、もしかすると視覚的なものと聴覚的なものの双方が外見上の美であって、それが私たちの内側に引き起こす個別の体験の中に真の美が宿されるのではないだろうか。

作曲実践を通じて作曲そのもの、そして音楽について考えていると、言語、人間発達、美学などの様々な領域と結びついてくる。だからこそ、私はそれら全ての探究を止めることはないのだろう。フ
ローニンゲン:2018/1/11(木)06:13

No.631: Space and Fulfillment

While listening to one of Haydn's last piano sonatas played by Glenn Gould, my desire to compose soul-soothing music like Haydn's works appeared. Although there are many components of such music, I have to understand how to incorporate rest marks in music. They would generate spaces for our soul to take a rest. Spaces are not hollows, but they are fulfillment. Groningen:
09:11, Thursday, 1/11/2018

1997. 存在関数と生命の発露

今日も一日の瞬刻瞬刻の中で、考えなくてもいいような思念に取り憑かれるかのように様々な事柄について考えていた。そうした事柄を考えている自分についてや、なぜそうした事柄に思考の矢が向かうのかも含め、とにかく取り留めもない思念の海を泳がされていた。ただし、そうした思念の大海の中でもがきながら泳いでいる自分の心の芯には、諦念にも似た感情が宿っている。

考えなくてもいい事柄について自分の思考の矢が向かうのはなぜか？その問いの答えは簡単すぎるほど簡単だった。今の自分の存在関数が、関数からの出力としてある思念を生み、その出力が新たな入力となって再び取り留めもない事柄に思考を向かわせているのだ、という明快極まりない気づき。結局私は、自らの存在関数を書き換えなければ、今後も引き続き同様の思念の海を彷徨うことになるだろう。

「存在関数を書き換える」と述べたが、それは私の意図を超えた次元で行われる事柄である。つまり、人為的にそれらを書き換えていくことは基本的にできないのだ。それでは、自らの存在関数を書き換えるものは何なのだろうか？その問いへの回答もまた至極明快なものだった。それは、思念の海を彷徨うことである。言い換えると、取り留めもない出力と入力の絶え間ない繰り返しが徐々に関数表記そのものを書き換えていくのである。ただし、それは単なる繰り返しであってはならない。絶え

ず差異を内包し、その差異に自覚的となった形でなされる繰り返しが存在関数を書き換えていくのである。これは人間発達の非常に興味深い特性ではないだろうか。

存在から生まれる出力が新たな入力となることすらも興味深いのだが、その絶え間ない出力と入力の繰り返しは、出力と入力の通り道である関数そのものを書き換えていくのだ。だから私たちは、存在関数が増減すれば出力が変わり、入力が変わるのだ。

今日は昼食前に晴れ間が顔を覗かせたため、近くのノーダープラントソン公園へランニングに出かけた。年末年始に日本に二週間ほど滞在していたため、最後にこの公園を走ったのはかれこれ三週間以上も前のことになる。

公園は以前と変わらずにそこに佇んでいた。公園内をジョギングする人たちや犬の散歩をしている人たちとすれ違う。自分ではない他者とすれ違うたびに私は、「一人であること」と「一人ではないこと」の隙間に打ち付けられるような感じがしていた。この思念もまた、全くもって取り留めもない。だが、それが自分の思考空間に姿を見せるのであるから、それと向き合わなければしょうがない。私は何一つとして、自分の内側で生起するものを見過ごすことができないのだ。

自分の命とは何だろうか。私たちの思考や感情一つにも命があると考えすることはできないだろうか。

私たちは、命というものが物質的な身体のみ宿っているものではないことを知っているはずである。命は多分に精神的なものでもあるのだ。そうであるならば、今、まさに今この瞬間に湧き上がる思考や感情、感覚すらも、私たちの命を構成しているもの、あるいは命そのものだと捉えることはできないだろうか。

この世界の全ての人々がそれらを命だと見做さなくても一向に構わない。私だけはそれらにも命が宿っているとみなす。だから私は、日々の自分の取り留めもない思考や感情を文章にし、曲として外側に表現しているのだろう。表現物というのは命の現れだったのだ。

ノーダープラントソン公園を走る一步一步は魂の躍動であり、その一步一步に応じて喚起される思考や感情、あるいは思考や感情も湧くことのない無の境地ですらも生命の発露のように思えた。フローニンゲン:2018/1/11(木)14:23

No.632: Principle of Unity and Variety

I finished all of the today's tasks, thus I'll practice music composition in the rest of the time tonight. I'll continue to read "Fundamentals of Musical Composition (1967)" written by Arnold Schoenberg. The focus of today's reading is motif development.

Although I understand the principle of unity and variety in my mind, it is still challenging for me to apply the principle to my music. For instance, when I repeat a motif, it sometimes becomes monotonous, which means too much unity. On the other hand, when I try to apply the principle of variety, my music often becomes incoherent. I have to discover the optimal balance between unity and variety. Groningen:18:11, Thursday, 1/11/2018

1998. 裸体の言葉と意思の顔

文章を書き書きに書いても、曲を作るに作っても、解決し得ない事柄が絶えず自分の内側に存在していることに気づいている。そうなのだ、私はもうそれに気づいているはずなのだ。だが、それでも私は文章を書き続けるだろうし、曲を作り続けるだろう。

先ほどの日記に書き留めていたように、表現行為というのは生命の運動に他ならず、表現物は生命の発露に他ならない。そうであれば、私が日々の存在記として文章と曲を残していることは、生命の運動であり、その発露に他ならないことになる。しかしながら、私はこの言葉でも全く納得できない。

私の魂が黙っていないのである。沈黙を知らない魂。沈黙を知らないのは私の魂なのか、私なのか。

なぜ私は、文章を書くことと曲を作ることが生の燃焼過程の純粋な形であるという言葉にとどまることができないのか。「生命の運動」「生命の発露」「生の燃焼過程」。そんな装飾表現はいらないのである。書斎の窓から見える裸の木のような言葉が欲しい。何も着飾ることのない、裸体の言葉が切に欲しいと思う。

昼食前にランニングに出かけ、今年初めて行きつけのインドネシアンレストランに足を運び、そこで昼食を購入した。レストランの人たちとは随分と顔見知りとなり、いつも笑顔で言葉を交わす。いつ

もの持ち帰りの料理を受け取り、レストランの扉を開けて外に出て、再びランニングをしながら家に向かおうと思って私は一步を踏み出した。その一步の瞬間に、「人間の仕事」に関する重い問いかけが、足元の石畳と同じほどに自分の存在に密着しているのがわかった。

今この瞬間に人生を終えることをせず、自分の仕事を形にしていこうという意味について私は考えていた。そもそもなぜ私は、自分の仕事をこれから形にしていこうと思っているのだろうか。その理由として、もはや世俗的なものはない。あるのは脱世俗的、超越的な理由なのだが、その理由ですら私は信じることができない。もうその答えの背中は見えているのに、その顔が見えない状況に今の私はいるようなのだ。

脱世俗的かつ超越的な理由そのものは、私が自分の仕事をこれから長大な時間をかけて形にしていこうという意味の背中である。しかしながら、それは意思の本当の顔ではない。いつまでその背中を見ながら走ることができるのだろうか。背中を見ながらではいつまでも走り続けることはできないと思うのだ。いや、そもそも走り続ける必要はあるのだろうか。

自らの仕事を長大な時間をかけて積み上げていこうとする意思の顔を見ることができたら、そこには走ることも歩くことも、ましてや止まることも超えた行為だけがあるような気がしてならない。おそらくその行為に至るとき、自分の仕事は初めて形となるのだろう。フローニンゲン:2018/1/11(木)14:42

No.633: “Three Classics in the Aesthetic of Music (1962)”

“Today” also started again. Everyday is today; today is everyday. Everyday is continuous and discontinuous today. In such today, I’ll begin to read “Three Classics in the Aesthetic of Music (1962)” written by Claude Debussy. Aesthetics, particularly aesthetics of music is one of my current central themes. It will enrich not only my music composition but also my life itself.

Groningen, 07:29, Friday, 1/12/2018

1999. 虚無的世界と豊満な日常

また新しい一日がやってきた。日本からオランダに戻ってきて以降、就寝中は明け方の三時半に必ず目を覚ましていたが、今朝はそのようなこともなく、六時の起床まで眠り続けていた。どうやら私は、

あの時間も空間も感じられない意識すら生じ得ない虚無的世界の中にずっと居続けていたようなのだ。目を覚ましてみると、ここからまた意識的に捉えられる、虚無の外側の世界での活動が始まることを知る。

この世界は虚無の外側にあってそれを包んでいるのか、むしろ虚無がこの意識的世界を包んでいるのかは定かではない。とにかく、今日という一日が始まったことだけは確かだ。

来週から再び大学での講義や研究ミーティングなどが始まる。実際には、今週から大学自体は始まっているのだが、私の受講しているコースや研究グループは今週まで休みである。来週からは以前のように、日常生活の中に科学的な探究活動が加わる。そうなれば日々がまた別の色彩を帯び始めるだろう。だが、毎日の生活の中にある色彩のない側面、つまり生活の本質を見据えていなければならない。日々の生活を変化に富んだ彩りあるものにしてくれる本質を見据えなければ、多様な変化や色調に目がくらむばかりである。

それでは生活の本質とは何であろうか？それはもしかすると、夢すら見ない夢の世界、つまり先ほど指摘した虚無的世界なのかもしれない。虚無的世界という言葉の否定的な響きに惑わされるのではなく、それが確かに存在しており、私たちは毎晩その世界へ足を踏み入れていることを忘れてはならない。実際には、それは夢の世界からアクセスすることができるだけでなく、本来は日々の生活のあらゆる瞬間にアクセスすることができるはずなのだ。

「虚無がこの豊満な日常を支えている」そんなことをふと思う。虚無的な世界があるからこそ、変化と色彩に富む日常が存在しているのではないだろうか。全てはこの虚無的な世界から生み出されるのではないか、という考えが意識上にポカンと浮かぶ。虚無の世界に囚われるのではなく、自己の存在もその世界からの現れに過ぎないという発想と共に、今日も一日の生活を形作っていきたいと思う。

今日は午前中に、協働者の方とのオンラインミーティングがあるが、それ以外に特に重要な仕事はない。そのため、その他の時間はいつもと同じように作曲実践を中心に据え、福永武彦氏の小説を少しばかり読むことと、ドビュッシーが執筆した美学に関するエッセーである“Three Classics in the Aesthetic of Music (1962)”を読み進めたいと思う。フローニンゲン:2018/1/12(金)06:58

Our inner world looks like a large river. It ramifies into various flows. How can we bring harmony to the distinct flows? Groningen, 08:12, Friday, 1/12/2018

2000. 可知的かつ不可知的な世界の中で

ふと気がつけば、これまで書き留めていた日記の数が私の誕生した西暦を過ぎ去り、現在の西暦に近づきつつある。

日記の数など一切問題ないのだが、日記に番号を振り始めてから、この二年ほどの間で随分の数の日記を書き留めていたのだと気づく。今でもそうだが、日々自分が確かに生きているという実感を求め、自己の存在証明を自らに行うために日記の執筆に熱を浮かせていると、気づかない間にこのような数の日記を書くことになっていたのだと思う。だが、私が日記の意義に気づき、日々のその瞬間瞬間に立ち現れる思考や感覚などを書き留めるようになってからまだわずか二年の月日しか経っていないことにも気づく。

確かにそれ以前にも別の場所で自分の日々を振り返るような文章を書いていたが、それは毎日ではなかった。日本を離れ、日本語空間の外側で生活を営んでいる私にとって、毎日日本語で文章を書くというのはどこか気乗りのしない非常に億劫なものだったのは確かだ。しかし、ある時を境目にそうした気持ちはどこか彼方の世界に過ぎ去った。代わりにやってきたのは、存在の克明な記録を意図した激しい執筆衝動だった。それがやってきたのが二年ほど前のことだと思う。

不思議なことに、今はそうした執筆衝動に基づいて文章を書いているのではなく、その先に待っていたまた別のエネルギーを基にして文章を書いている。それは以前のような激しい力を持ったエネルギーでもあるが、本質的には極めて穏やかだ。激しさの向こう側にある平穏な波のようなエネルギーが自分の内側に流れているのがわかる。そうしたエネルギーに基づいて日々の日記を書き留めているのと同じように、これからは日記的な曲を絶えず残していきたいという気持ちが強くある。

今はまだ音楽言語の習得過程の初期の段階にあり、音楽言語を用いて文章という曲を作ることは到底おぼつかない。一・二行の文章が書けるかどうかの段階にあり、その一行すら納得のいくもの

を生み出すことは難しい。しかし、言語の習得過程というのは概ねそのようなものであり、焦っていても仕方ない。今このように日本語で日記を執筆していると同様の次元で曲を生み出すところまで、日々一歩一歩、作曲理論の学習と作曲実践を積み重ねていきたいと思う。

昨日の夕方、私は不思議な感情の中にいた。知ることの幸い、知らないことの幸い、知ることの不幸、知らないことの不幸。これら四つの幸不幸が入り混じった感情の中に私はいた。

日々この世界で生きるに際して、常に世界は私の知っていることと知らないことに基づいて動いていることに気づく。それに対して私は、上記のような四つの感情を同時に抱き、それらの感情が入り混じった感情世界の中にいたのである。

この世界には知ることによって開ける世界の美しさがある一方で、知ることによる苦しみの世界も存在している。実際には、知ることと知らないことを取り巻いているのは、喜びの世界や苦しみの世界だけではない。美しい世界や醜い世界、静かな世界や激しい世界など、この世界の無数の諸相が存在している。

知ることと知らないことが自分の内的世界に及ぼす力について、私は立ち止まって考えを巡らせていた。拡大していく知られた世界と、知れば知るほどに深まっていく知らない世界。この世界はどこまで行っても可知的であり、不可知なのだろう。フローニンゲン:2018/1/12(金)07:23

No.635: Unfathomable Inner World

I'm often struck by the depth of not only my inner world but also others'. Our inner world is always unfathomable. The incomprehensibility entices me to explore fathomless human inner world. That is why I may be engaging in art, philosophy, and science. Groningen, 08:52, Friday, 1/12/2018